



# 歴史は現代文学か？ : イヴァン・ジャブロンカ『歴史は現代文学である』を対象に

朴, 沙羅

---

(Citation)

国際文化学研究 : 神戸大学大学院国際文化学研究科紀要, 53:97\*-111\*

(Issue Date)

2019-12

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/81011959>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81011959>



# 歴史は現代文学か？

イヴァン・ジャブロンカ『歴史は現代文学である』を対象に

朴 沙 羅

本書は2014年にSeuil社から出版された*L'histoire est une Littérature Contemporaine*の全訳である。著者は現在パリ第13大学の教授として、児童福祉の歴史を専門としている。現在までに14冊の著書を刊行し、中でも2012年に刊行した『私にはいなかった祖父母の歴史』はアカデミー・フランセーズ・ギゾー賞、歴史書元老院賞、オーギュスタン・ティエリ賞を受賞した。著者自身によれば、本書はこの『私にはいなかった祖父母の歴史』の理論的な基礎をなしている。

本書の独創的な点は、著者が史学史・文学史を踏まえ、歴史学と文学の対立を止揚させようと試みた点にある。著者はまず文学史と関連付けながら史学史を整理し、次いで歴史学の叙述方法の特殊性を検討したうえで、その新たな方針を提案する。すなわち歴史学の対象を過去の事実だけでなく、それを調査する研究者自身に広げることである。

本稿ではまず各章の論点を概観し、次いで本書の主張である「社会科学としての歴史学は文学である」という命題と、著者の提案する「研究者自身を叙述の対象とする」という方針について検討する。

## I. 本書の構成と問題意識

まず本書の構成を概観する。本書は3部構成をとっており、序説および12章からなる。第1部（第1章から第4章）は史学史を概観し、第2部（第5章から第8章）では歴史学の叙述方法の特徴を分析し、第3部（第9章から第12章）は著者独自の文学論に基づいて、文学作品となりうる歴史叙述の方法を提案している。

## 1. 「大いなる分離」

「歴史 *histoire* でも文学 *literature* でもあるようなテキストを想像できるだろうか」という「挑発的な問い」から始まる序説は、本書全体の見取り図となっている。著者は文学が歴史学・社会学・人類学に適切な表現方法であり、社会科学は「現実についての知識を生産する」「現実を再現する」「現実を説明する」という3つの理由により、文学に含まれると主張する<sup>i</sup>。

この宣言を受けて、第1部「大いなる離別」は、ヨーロッパの文学史と史学史を関連づけ、歴史叙述が文学と対立するものと位置づけられたのは19世紀後半のことだと論じている。つまり19世紀後半まで、文学と歴史学とは対立するジャンルではなかった。18世紀から徐々に文学の中で小説の比重が高まり、他方で研究の制度化が進んだことによって、歴史学は文学の1ジャンルではなく科学、すなわち文学にあらざるものになることを選択した、というのだ。すなわち「歴史は最初から文学（詩、レトリック、文芸という意味での）と親密な関係にあった。それが19世紀に文学から身を切り離して科学として誕生したのである」（p. 14<sup>ii</sup>）。

ジャブロンカは、古代ギリシャ・ローマでは、文学は学術と同義であり、歴史は雄弁として、また英雄への賛辞として、あるいは悲劇として書かれたと述べる。ヘロドトスはその「詩人」としての側面のゆえに誹謗された。ゆえにトゥキディデスは自らを、ホメロスやヘロドトスと差異化し、「脅威」や美文を廃して歴史を叙述した。ポリュビオスは悲劇作家に見られる厳密さの欠如を批判した。他方、歴史学は雄弁術の手段でもあった。歴史は弁論術や文体を学ぶものの資源として役立つ一方、単なる（権力者への）賛辞であることは歴史学として不適切だとみなされた。詩・雄弁術・賛辞は、歴史学にとって自らを差異化する対象だった。この時点で既に、この三者の対立物——すなわち感情なき歴史、飾り気なき歴史、傾向なき歴史——という「科学としての歴史」（p.23）のプロトタイプを見出すことができる。

中世から17世紀にかけて、学術は神学と文芸、すなわち数学、天文学、歴史学等々に分かれた。17世紀まで、歴史学は人文主義的知識の全体を指す「文

学 *lettere*」の下位分類である所の文芸 *belle lettere* だった。しかし次第に歴史学は、過去の出来事を書き留める回想録として、あるいは未来への教訓を導く説教として、そして権力とは別の論理を持つ学識として、ジャン・ポダンやロレンツォ・ヴァッラによる方法論が書かれる。

18世紀になると、文学と科学とが共にその性質を変化させる中で、歴史学は文学と別のものとして確立する方向を模索し始める。まず「作家 *écrivain*」という概念が登場する。他人の著作を引用する学術的文人（文学太郎 *jean de lettere*）とは異なり、作家とは書齋に閉じこもり、公衆のために創造を通じて社会参加する偉大なる人物である。そして、小説が文学の中心あるいは代表と見なされるようになった。小説が文学の中心になる中で、文学は「世界に取って代わる」野心を持ち始める。ジャブロンカは、歴史学にとってテキスト外のことを報告することが目的になったことと、文学のこの変化とを関連づけている。

他方、数学や天文学は「文学 *lettere*」に対して「科学 *science*」として自己を位置づけ、科学と文学とが分離していった。そして科学はフランス学士院や高等師範学校で科目としての正当な地位を得る。文学が真理や厳密さとは異なるものだと見なされるようになるのは、この、いわゆる「理系」と「文系」との対立のゆえである。18世紀末から19世紀にかけて、碑銘学・古銭学・印章学といった歴史研究の技術が体系化されたのは偶然ではない。歴史学は文学ではなく科学になることを、ジャンルとして選択したからだ——とジャブロンカは主張する。

19世紀には、シャトーブリアンやウォルター・スコットによる歴史小説が「歴史を書く新しいやり方を発明」し、学問として制度化されつつあった歴史学の叙述方法に影響を与えた。すなわち歴史より本物らしい歴史描写による「真実らしさ」や、資料を通じて過去の複雑な利害／人間関係を描写し、過去の人々は現在の自分たちと同じ人間であるという感覚を読者にもたらしめた。この叙述方法は、どちらも問題意識や領域、証明方法の点で歴史学と対立した。

他方、「19世紀後半、科学主義は小説と歴史という方法としての文学の2つ

の形式を同時に飲み込んだ」(p.58)。バルザック、ゾラ、クロード・ベルナールといった芸術家としての作家たちによるリアリズム小説が生まれる一方、歴史学は自らを科学として、すなわち客観性を重視し、原資料を用いる専門家集団という「方法的歴史家」によるものとして規定していった。結果として、19世紀後半から20世紀前半にかけて、文学と歴史学は、新たに学問として生まれつつあった社会学と共に、競合関係に入った。すなわち文学は科学ならざるものとして歴史学や社会学にとって蔑むべき対象となった。文学はまた、社会を理解するという関心を社会学と共有していた。そして歴史学は個人や個別事例を扱う点で、集団を対象とし法則を定立しようとする社会学にとって「科学的」でないと見なされた。

20世紀後半、言語論的転回による歴史と文学の対立は更に先鋭化した。なぜなら、この「転回」は歴史学と文学の類似性を指摘するものだったからだ。そのため、歴史学は自らがどのような点で文学でないかを、より激しく主張することになった。すなわち文学は「真理が存在しない自由な空間」(p.91)たる「フィクションの王国」として、普通の人々の経験を扱い「上級の真理」を描くものであるのに対して、歴史学はあくまで個別の事件を対象に、「外的」真理を描くものであるとされた。そして、文学は歴史学にとって資料や研究対象、あるいはインスピレーションの源泉となった。

## 2. 歴史叙述の特徴

第2部で著者は、様々な観点から歴史叙述の特徴を検討している。まずジャブロンカは歴史と小説の叙述方法を比較する。そして、小説は現実効果を狙い、＜歴史＞すなわち記憶すべき事実の物語を書く、模倣（ミメーシス）であるのに対して、歴史は「現存効果」を狙う知的活動、あるいは意味を追求し理解（verstehen）を試みる解釈科学として知識（グノーシス）を生み出すと述べる。その記述方法は人類学的な「厚い記述」、つまり知識を生産し意味の構造を解明するものだ。歴史学における因果関係とは、事件の秘められた特殊性を説明する（p.109）。

では、科学としての歴史叙述に必要な要素とは何だろうか。ジャブロンカは

古代ギリシャや16世紀フランスの歴史家・学者たちの議論からその要素を取り出す。ヘロドトスは資料とともに調査者としての自己を提示した（p.117）。アリストテレスは「物語としての歴史」と「調査としての歴史」の対立を概念化した。ジャン・ボダンやロレンツォ・ヴァッラは、原資料と批判的学識が必要だと論じた。ライブニッツは仮説・論理・証明によって歴史学は科学的になると論じた。それらに続けて、ジャブロンカは歴史叙述における怒りと批判の役割を強調する。

歴史叙述において「真理陳述の作業」（第7章）とは、何をどうすることだろうか。ジャブロンカは、調査対象の論理を解明することであると言う。それには自分自身の立場や原資料から距離を取ること、調査（過去の痕跡をアーカイヴ等から得ること、インタビューや参与観察による接触、調査対象となる場所に赴いたり実験したりすること）、対象となる過去の出来事の「比較と一般化」（p.141）、そして仮説と証拠を立てることだ。仮説と証拠こそ、科学と非科学、そして歴史とフィクションを分けるものだとジャブロンカは指摘する。歴史学による知識の確実性は、テキスト外部とのつながりによってもたらされる一方で、常に立証が求められる暫定性の中にある。そして、歴史の対象は意味のない事実の断片と問いならざるものとの間にある（p.159）。

ジャブロンカは、続く第7章でフィクションを取り上げる。曰く、フィクションは真実でもなければ虚偽でもなく、その対象はテキスト内にとどまる場合もあればテキスト外を参照するものもある（pp.154-6）。神話や空想のような「信じがたいもの」も、場合によっては信じ得る「真実らしいもの」もフィクションである。「上級の真理」と呼ばれる、真実を超えるフィクションもあれば、叙事詩、神話、詩といった「啓示としてのフィクション」もある（p.156）。ジャブロンカによれば、よく知っているはずの事柄を批判したり異化したりする記述はフィクションであり（p.164）、因果関係を想定したり概念化・理論化することもフィクションである。簡潔に言えば、フィクションには小説に向くものと歴史／社会科学に向くものがある。フィクションだからと言って事実でないことを意味するわけではないし、科学的でないということにもならない。

### 3. 新たな方法

歴史叙述の特徴を整理した上で、著者は第3部で歴史叙述のための新たな方法を提唱する。この部分は確かに、本書の副題である「社会科学のためのマニフェスト」と呼ぶにふさわしい。第9章では、歴史と文学の境界を検討するのではなく、方法とテキスト（書法）との組み合わせを検討し、20世紀の歴史は「現実についての文学」という一連の作品群を生み出したことをまず指摘する。そして、社会科学は「証拠に基づき、比較や一般化を通じて、知識を生産するもの」とであるという定義に基づき、文学対歴史学ではなく、フィクション・「事実に基づく」物語・調査という3分類を提案する（p.199）。さらに、文学の定義を再検討（pp.204-5）し「文学とは感動を生み出すテキストである」（p.206）と定義する。そこから「歴史は、それが研究や、行程や、調査や、開示であるとき、ただちに文学となる」（p.208）という宣言が生まれる。「現実についての文学」は、テキストにおいて、テキストによって、真実を述べようとするようなテキストであり、その真実とは調査と独創性から導かれるというのだ。

第10章では文体や注といった「歴史の技法」を検討し、歴史家に課された資料上・表現上の制約は、自由な表現を促すものと指摘する。そして「社会科学の存在理由は、理解と説明、真理陳述の作業にある」（p.231）一方で、読む楽しみを回復させることもまた重要だと訴える（p.234）。したがって、楽しみを与える社会科学は、研究者の個人的な動機を掻き立てる、関係や事件や研究者個人のアイデンティティに関するものを選ぶことをためらうべきではないと主張される。

ジャブロンカにとって、『私にはいなかった祖父母の歴史』は「方法を物語る」という「文学的かつ認識論的実験」だった。ジャブロンカはこの著作が「調査でも証言でも自伝でも物語でもあるような形式の中に、社会科学を組み入れる」試みであり、論理を実行するがゆえに歴史、テキストを活動させるから文学であるような作品だと自負する。つまり人間の行動を描き、論理を用いて読者の感情を動かし、描かれる人間の行動を理解することを可能にするような作品だ。「社会科学の文学的な可能性を現実化するために、客観的モードの反対のこと

を試みる必要がある」（p.238）とジャブロンカは述べ、この「客観的模式」を批判する。曰く、客観的模式は社会科学の要求と両立しない、客観的模式は証拠などの批判的要素を排除して注の中に片付け、現実効果に満ちた物語を生産する、客観的模式は話者の主観性を否認する、そして自分自身の視点をはっきりしなければ、自分の仕事に批判的視点に向けることはできないことから、客観的模式は科学主義の欺瞞的態度を導く。

しかし、ジャブロンカにとってこの客観的模式は客観性とは別個のものである。なぜなら彼は続けて「歴史における客観性は話者の立場についての記述の上に成立する」（p.240）と述べるからだ。社会科学の客観性は批判的議論（集団レベル）と状況分析（個人レベル）に存在し、ブルデュー『社会学の社会学』に見られるように、「自分自身の視点についての視点」は社会科学の方法に属する。方法としての「私je」（≠自我moi）は社会科学のフロンティアであり、大きく開かれた展望を持つ。「私」は自らの立場を示し、論理を展開し、感情的な行程を示す。ジャブロンカが目指すのは、「歴史の物語ではなく歴史の論理の物語」（p.249）である。

第12章「調査あるいは脱専門化の時代」では、この方法としての「私」を記述することが、すでに大学にも市民社会にも根付いている歴史と社会学とを、文学に開く道だと述べる。脱専門化の時代には、知や書法についての様々な実験を一つのテキスト内に共存させることや、調査・論理・方法・社会科学である歴史を実践することができると指摘し、社会科学の任務は証拠と論理によって「立証すること」、読書の楽しみを通じて読者からの「好意を得ること」、そして正確さや心理陳述の努力や調査者の謙遜によって読者を「感動させること」の3点だと述べる（p.262）。そして、歴史でも小説でもない、「現場に密着した性質を持つ、実用的な文学」（p.264）を志すことを読者に促し、研究論文が雑誌や出版社のウェブサイトで交換されたり、大学の学科が映画やジャーナリズムの学校と提携したりする未来を展望し、本書を閉じる。

## Ⅱ. 方法としての「私」をめぐる

本節では、著者の提案する「研究者自身を叙述の対象とする」という方針について検討する。

### 1. 史学史と「個人の語り」

本書を通読してまず念頭に浮かんだのは、文学史と史学史との関係が、ジャブロンカの分析する通りなのか、筆者の浅薄な知識では判断できないということだ。本書に（おそらく意図的に）注や参考文献が設けられていないことが、その大きな理由である。例えば人文学・社会科学の制度化は、科学史や史学史でしばしばとり上げられるが、歴史学がこの制度化の中で文学から分離したとジャブロンカが指摘するその根拠は、本書の中では明示的に示されていない。また、史学史や歴史学の方法論については、ル＝ゴフ<sup>3</sup>をはじめとする幾多の論考があり、それらと対比したときジャブロンカの独自性は見えづらいように思われる。

また、史学史的な内容に限らず、本書の記述には、言及されていておかしくないものが言及されていない場合がしばしば見受けられる。たとえば、本書第5章で著者は、言語論的転回が20世紀後半に生じたあと、文学と歴史学とはさらに分離するようになったと述べている。つまり「歴史家たちは自らの方法論の説明に神経をとがらせるようになったが、その際に、書法をレトリックとフィクションのトロイの木馬とみなし、そこから排除するようになった。……ナラティヴィストが歴史は語られ物語られるものであると証明することに成功したその瞬間に、歴史はポストモダンの懐疑主義によって——またもや——文学に反するものと自らを定義せざるを得なくなったのである」（p.87）という説明だ。

しかし、長谷川貴彦によれば、イギリスでは「言語論的転回のメッセージを積極的に受け止めた認識」<sup>iv</sup>の結果として、自叙伝や日記、書簡など、エゴ・ドキュメント（自己文書）と呼ばれる一人称で書かれた資料を用いた、パーソナル・ナラティヴと呼ばれる「個人の語り」に着目した研究が、現代史のみならず近世史・中世史にまで拡大してきている。長谷川は言語論的転回以後、イギ

リス歴史学が参照する「理論」がフランス文学理論から英仏の社会学へ変化したと指摘するが<sup>v</sup>、フランス史学ではそのような変化は生じていないのだろうか。言語論的転回についての議論では、ジャブロンカはローレンス・ストーンやヘイドン・ホワイトなど、主に英米の議論を引用している（出典は明示されていないが）。であるなら、その「転回」以後の英米の歴史研究がどのように展開したかについての議論を期待するのは、おかしいことだろうか。

さらに、もしジャブロンカのいう「社会科学」が歴史学のみならず社会学も含むのであれば、本書において社会学の伝記・個人史研究が引かれていてもおかしくなかった。個人の人生（生活史）を階層移動や歴史的事件、多文化化のデータとして扱う個人史研究は、しばしば歴史学と共同研究の成果を生み出している<sup>vi</sup>。ジャブロンカは本書の中で1箇所、ブルデューに言及しており、ブルデューは論文「伝記的幻想」で、フランスにおける生活史研究者のダニエル・ベルトーと論争した。ジャブロンカが「伝記的幻想」を読んだ可能性は高い。しかし、ではなぜ伝記的研究が参照されていないのだろうか。個人の人生を社会や歴史の中で理解するのは、本書を読む限り、ジャブロンカのいう「歴史の論理」からそう外れてはいまい。

また、本書の中でしばしば用いられる「客観」という用語についても（これはジャブロンカに限ったことではなく、エゴ・ドキュメントやパーソナル・ナラティブ研究にも言えることだが）、それが一体いかなるものであるのか、研究者コミュニティ内で同僚達を説得できる言説は、果たして「客観」であるかといった問題について、本書では説明がなされていない。それに対置される「主観」「主体」といった用語についても同様である。

## 2. 方法としての「私」

筆者は、調査における「私」という問題を論ずるのであれば、人類学における調査者の立場性の議論やオートエスノグラフィの方法論について何らかの言及を期待していた。なぜなら、この話題はすでに1980年代から人類学において激しく論じられており、そこにおいてジャブロンカの論旨と無縁でない論点が出されているからだ。ジャブロンカは、調査対象と調査者との距離のゆえに、

調査者はバイアスから自由になると主張しているように思われる（p.133）。果たしてその「距離」の議論において、人類学者や社会学者が過去30年ほど論じてきた立場性と倫理性の問題はどのような位置を占めるのだろうか。

人類学で民族誌的権威や調査する側とされる側との支配関係、知識と権力、支配の結びつきが指摘されたことや、そこから省察性を重視したエスノグラフィックな調査が重視されたことは、テドロック<sup>iv</sup>やエリス<sup>v</sup>の示す通りだ。しかし、オートエスノグラフィへの批判が今も続いている<sup>vi</sup>ように、観察と立場性の問題は、学問的知見をもたらさねばならないという学術研究の性質と相まって、未だ解決を見ていないように思われる。

さらに、自己に関わる研究を選択するのを恐れるべきでないというジャブロンカの提案にも疑義が出されている<sup>vii</sup>。ここで指摘されている論点は、ジャブロンカの主張にとって重要だろう。すなわち研究対象が研究者自身の社会における抑圧の問題で、同時にその研究者が抑圧される側に属していることがはっきりわかっているとき、研究者自身の自己批判の技術は低くなる傾向がある。なぜなら、そのような対象を研究する人々に向けられる意見は、その研究者に共感し、かつその対象となる抑圧に関して研究者以上に「ラディカルなスタンス」に立つものか、あるいは「非共感的であり、様々な理由で他人にどう思われるかを気にしない」ものになるからだ。そして、社会的な抑圧に非共感的な態度を取る人が、多くの場合「道徳的に間違っている」と見なされやすいことを考え合わせれば、研究者自身のアイデンティティに関連する研究テーマを選択することを戸惑うべきでないというジャブロンカの提案は、むしろ危険な提言だと言える。

「客観的モード」についても疑問が残る。何らかの科学的知識、たとえば「パルサーの発見」について知りたい人にとって、パルサーの発見に取り組む研究室でのやり取りや、その研究室における研究者個々人の思考の過程を明かした情報は、どのていど重要だろうか。ジャブロンカは「我々は社会科学の要求をよりよく満たすために、叙述の重心をずらして、物語の一部を研究そのものに——つまり、我々が推論し、調査し、懷疑し、立証したそのやり方に——充て

ることできるだろう。書物の中心はもはや歴史の物語ではなく、歴史の論理の物語になるだろう。それは知的活動のルポルタージュであり、歴史はそれなしでは単なる表面的な「叙述」に過ぎないだろう」(pp.249-250)というが、ではパルサーが発見されたと述べる論文は、客観的模式による「表面的な「叙述」」として批判されうるのだろうか。もしそうでないなら、なぜ歴史学(や社会科学全般)は「表面的な「叙述」」ではいけないのだろうか。そもそも「表面的」とは何だろうか。なぜ研究者の推論し調査し懷疑し立証した過程を記述すると「表面的」でないことになるのだろうか。

このように考えれば、パルサーの発見と、パルサーを発見する研究室の記述とは、重要性の文脈が異なっていることがわかる。前者は物理学や天文学にとって、後者は社会学、中でも科学的発見の相互行為分析や知識社会学的関心の持ち主にとって、意義がある。したがって、両者はそれぞれ別個の研究である。個々の学術的知見と、そこに至る調査研究の営みとは、異なる学術的関心に基づき、異なる先行研究を持つ。ハロルド・ガーフィンケルらが天文学者グループのパルサー発見時の会話を分析し、その発見のローカルな歴史性を回復させようとしたのは1981年のことだ<sup>xi</sup>。パルサーと過去の人々とは同じではない。しかしジャブロンカにとって、この話題もおそらく、無縁ではあるまい。

方法としての「私」はまた、本書の末尾で積極的に主張される、社会科学の目的なるものと関係している。しかし、本書の第2部・第3部を通じてしばしば主張される「感動」に対して、筆者は疑念を抑えられない。ジャブロンカは本当に、読者に読書の楽しみを提供し、読者から感動されることを目的に、調査の結果を著しているのだろうか。アウシュヴィッツで死んだ彼の祖父母を描いた、感動的というよりもむしろ鬼気迫るあの文章は、ジャブロンカが読者に読書の楽しみを提供したり、読者を感動させたりすることを目的とした文章なのだろうか。ジャブロンカが、時間的にも空間的にも彼と同じものを共有しない、しかし「同じ人間」であるはずの人々の生を、研究という彼の職業に利用して試みているのは、果たして、「読者から好意を得る」「読者を感動させる」ということなのだろうか。もしそうであるなら、その目的を知った読者は、彼

の著作に果たして感動できるだろうか。

関連すると思われる諸研究が引用されていないという点をおいたとしても、筆者は調査する「私」なる方法と、ジャブロンカのいう社会科学の目的なるものに対して、疑問が3点ある。1点目は、果たして社会科学（歴史学と社会学の一部）の目的が、読者を楽しませ、感動させることでいいのか（重要でないというわけではなく、主たる目的でいいのか）ということだ。2点目は、ジャブロンカは本当に、調査過程における調査者を描くことで、読者が感動すると考えているのだろうかという点だ。そして3点目は、仮に「同じ人間」であったとしても、その人々を何らかの形で利用して得るものが、研究者への好意や作品への感動でいいのか、ということだ。ジャブロンカは学術の力を、その程度にしか、信じていないのだろうか。その程度の目的のために、たとえ「距離」があるとはいえ自分とは違う過去の人々を、私たちは利用してしまってもよいのだろうか。

### 3. 歴史学における「真実」

すでに長谷川貴彦が「主体」「主観」という語を用いて指摘する通り、歴史学において個人なるものをいかに描くかという問いは、言語論的転回以後の歴史学において重要な問題となっている。固有の内面を持つ（と想定される）個人、他人とは異なる唯一にして不可分の存在とはいったい何であるのかという問いに答えてきたのは、近代以後の文学だった。遅塚忠躬は文学と歴史学との関係について、史料が残されていないため知り得ない「個人の内面」なるものに属する情報を「真実」と呼び、それを文学の担当領域としている<sup>xiii</sup>。つまり、歴史学的な研究方法では明らかにできない事柄を放りこむためのブラックボックスについた名前が「個人の内面」であり「真実」であるということになる。

ところで、本書において、ジャブロンカはたびたび「真実」や「真理」という語を用いている。たとえば「現実とは、無意味のうちに与えられた、そのままの事物<sup>xiv</sup>である。それに対し真実とは、知的操作の結果や知識の要因であり、理解に貢献するものである」（p.102）と、現実と真実を対比する。これと「切り離された現実の切れ端は、論理と無縁であるがゆえに、真実と関係を持たな

い」(p.104)、「社会科学の実践は、真理を見つけることにあるのではなく、論理を組み立て、証拠を管理し、できる限り堅固で妥当な説明を備えた記述を作成することで、真実を述べることにある」(p.150)といった言明とを考え併せるならば、ジャブロンカにとって現実とは何らかの「テキスト外のもの」あるいは「そのままの事物」であり、それを述べるのが真理、その真理や現実に基づく論理的説明が真実であると推論できる。したがって「小説はこのようにして、誰もが「真実」でないと知る物語を語りながら、歴史以上に「真実」な知識を伝えたと述べる」(p.91)とジャブロンカが述べる際の「真実」は、遅塚のというような文学や個人の内面や「私の魂の物語」(p.90)ではなく、読者を説得するための妥当で筋道だった説明を指すだろう。

歴史学における真実が、史料を通じては知り得ない個人の内面に関わるものであれ、学術共同体における説得を目的とした論述であれ、それはどちらも社会学的な考察の対象となる。前者は「個人」という概念が歴史叙述と歴史研究においてどのように扱われてきたかを示す資料となる。後者は、歴史学の方法論が、「テキスト外のもの」と特殊な仕方結びついていることと、そこに歴史学の科学性があることを示している。ジャブロンカの意図から外れる可能性が高いが、これらの話題は歴史学にとって重要であり、また歴史学実践の社会学としても探求しうる話題である。

著者は断片的で浅薄な知識から、身の程も知らず、当代随一の歴史家の提案に難癖をつけているに過ぎないのかも知れない。本書は歴史学者からのみならず、文学史研究者や人類学者からも評価されるべき作品であることは間違いない。本書を通じて、歴史学の方法論に関する議論が活発化することは、関連する対象を扱う他の学問分野にとっても有益だろう。

## 注

- i 本書では、この社会科学なる用語は歴史学とほぼ同義で用いられており、通常は社会科学に含まれると考えられる法学・経済学・政治学・社会学といった他の学問分野を指すものではないと考えられる。これはフランスの大学

で、歴史学が社会科学の一分野として教授されていることを反映したからではないか。

- ii Jablonka, Ivan, 2014, *L'historire est une Litterature Contemporain: un Manifesto pour Science Sociale*, Seuil. (=2018, 真野倫平訳, 『歴史は現代文学である：社会科学のためのマニフェスト』岩波書店, p.14。以下、特に注記のない限り、( ) 内のページ番号は本書からの引用であり、傍点は原著者によるものである。
- iii Jacques le Goff, 1977 *Storia e Memoria*. Giulio Einaudi (= 1999, 立川孝一訳, 『歴史と記憶』法政大学出版局), pp.199-323.
- iv 長谷川貴彦, 2016, 『現代歴史学への招待：言語論的転回を超えて』岩波書店, p.104.
- v 上掲書, p.108.
- vi Bertaux, Daniel and Thompson, Paul, 2006, *The Pathways to Social Class: a Qualitative Approach to Social Mobility*, Transaction Publishers.
- vii Tedlock, Barbara, 1991, "from Participant observation to the observation of participation", *Journal of Anthropological Research*, vol.47(1): 69-94.
- viii Ellis, C. (2004). *The ethnographic I: A methodological novel about autoethnography*. Walnut Creek, CA: AltaMira Press.
- ix Ploder, Andrea, and Stadlbauer, Johanna, 2016, "Strong Reflexivity and Its Critics: Responses to Autoethnography in the German-Speaking Cultural and Social Sciences", *Qualitative Inquiry*, vol.22(9): 753-765.
- x Heath, Joseph, 2015, "The problem of "me" studies", *In Due Course* (<http://induecourse.ca/the-problem-of-me-studies/>, 2019年9月30日取得).
- xi Garfinkel, Harold, Lyuch, Michael, and Livingston, Eric, 1981. "The work of a discovering science construed with materials from the optically discovered pulser", *Philosophy of the Social Sciences*, vol.11(2):131-158.
- xii 塚塚忠躬, 2010, 『史学概論』東京大学出版会
- xiii 「無意味のうちに与えられた、そのままの事物」なるものが本当にあり得るのか否かという問題や、この問題に答えようとしてきた議論は引用されていない。

## 歴史は現代文学か？

イヴァン・ジャブロンカ『歴史は現代文学である』を対象に

朴 沙 羅

本書は2014年にSeuil社から出版された*L'histoire est une Littérature Contemporaine*の全訳である。本書の独創的な点は、著者が史学史・文学史を踏まえ、歴史学と文学の対立を止揚させようと試みた点にある。著者はまず文学史と関連付けながら史学史を整理し、次いで歴史学の叙述方法の特殊性を検討したうえで、その新たな方針を提案する。すなわち歴史学の対象を過去の事実だけでなく、それを調査する研究者自身に広げることである。

本稿ではまず、各章の論点を概観し、次いで本書の主張である「社会科学としての歴史学は文学である」という命題と、著者の提案する「研究者自身を叙述の対象とする」という方針について検討する。著者の提案には、史学史や人類学、社会学的な話題が多く含まれているが、それらの先行研究が引用されていない。また、著者の主張する歴史叙述のための新たな方針には、研究倫理上も疑問点がある。しかし本書の提起する問題は、歴史学のみならずいわゆる「質的」な調査を行う人文学的・社会科学研究に刺激を与えるだろう。